



TITLE:

教育現場とのコラボレーション: 和歌山県教育委員会との連携

AUTHOR(S):

吉田, 正純

CITATION:

吉田, 正純. 教育現場とのコラボレーション: 和歌山県教育委員会との連携. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 88-88

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179717>

RIGHT:

和歌山県教育委員会との連携

1. 和歌山県教育委員会との協定締結

2011年3月16日、本学教育学研究科・教育学部と和歌山県教育委員会は連携協定を締結し、和歌山県の教育の充実・発展と、本学研究科の研究・教育の推進を目指すことが決定された。京都大学楽友会館でとりおこなわれた協定調印式には、和歌山県教育委員会から山口裕一教育長ら、本学教育学研究科から辻本雅史研究科長らが出席され、交流に向けた着実な取り組みを行なっていくことが確認された。具体的には、京都大学から派遣された教員等による講義・研究協議や京都大学への研修ツアー等を通して、高校生等に多様な学びの機会を提供するものである。教育実践コラボレーション・センターはその実質的な連携の窓口の一つとしてコーディネートすることになった。本年度は早速、和歌山県教育委員会から県内の学校に対して希望調査・審査・助言を行ない、次のような連携活動が実施された。



▶交流協定調印式（辻本研究科長、山口教育長）

2. 和歌山県立橋本高校との連携

8月24日、和歌山県立橋本高等学校および併設の古佐田丘中学校の生徒ら43名が京都大学に来学し、研修ツアーを実施した。研修では物質—細胞統合システム拠点（iCeMS）を訪問し、同センターの中辻憲夫拠点長から、ES細胞・iPS細胞についての講義が行なわれた。中辻教授は橋本高校の卒業生でもあるということで、世界でも最先端の研究内容や研究施設とともに、研究の面白さ・奥深さにも興味をもっていたようだった。

その後、大学生協・食堂や、京都大学総合博物館、時計台百周年記念館・歴史展示室などを見学した。教育学研究科で行なわれた集まりでは、辻本教育学研究科長のあいさつや、橋本高校卒業生で京都大学在学中の先輩からのアドバイスなどが行なわれ、将来の進路を考える具体的なイメージをつくるものとして、学生たちは真剣に聞き入っていた。また8月29日には、本学教育学研究科の南部広孝准教授が橋本高校の始業式を訪れ、「大学入試とは何か—東アジア諸国の比較から考える」と題して講演を行なった。



▶中辻教授の講義を聞く橋本高校の生徒たち

3. 和歌山県立桐蔭中学校との連携

11月16日には、和歌山県立桐蔭中学校の生徒ら約80名が、京都大学に進路学習（コンパス2）の一環として研修ツアーに訪れた。研修では最初に本学教育学研究科の辻本研究科長からのあいさつの後、同研究科・楠見孝教授の講演が行なわれた。楠見教授は心理学の基本的な考え方や実験・研究手法についての紹介や、デジャヴ現象や記憶の仕組みといった、最先端かつ学生の興味をもつテーマについてわかりやすくお話しされた。中学生たちはワークシートなどを使った研修に非常に興味を持ち、質問コーナーでは中学生から事前学習を踏まえたしっかりした質問がいくつも出された。

生協で食事の後、京都大学総合博物館を訪問し、開催中の「INCLUSIVE DESIGN NOW」（塩瀬准教授が解説）や「埃及考古」等の見学を行なった。学生たちは展示内容はもちろんのこと、ジャングルでの調査や動物標本作りなど、研究の面白さにも興味を覚えていたようだった。訪問後、参加した学生たちの「手紙」形式での感想をいただいたが、見聞きしたさまざまな事物や人から真剣に学んでいることがわかるもので、連携の意義を改めて感じさせてくれる内容だった。

4. 今後に向けて

2011年度内の連携活動としては他に、和歌山県立和歌山高校の先生方と何度か協議を重ね、総合学科における生徒の問題関心・意欲等についての協力・研究を進めることが検討されている。特に総合的な学習や生徒指導などの領域で、臨床心理・教育方法・生涯学習など、さまざまな分野の大学院生等がチームで学校を継続的に訪問し、問題把握・問題解決の糸口を探っていくと考えている。第一回目として1月19日の「産社・総合発表会」に参加して、教員・生徒との交流・協議を行なった。

本学教育学研究科は附属学校をもたない研究科であるが、教員養成のみならず教育の理念や現状分析について、専門的な知見を提供する能力と責務が求められている。こうした連携の取り組みは、専門領域を越えて現場の問題に取り組むコラボレーションの活動そのものであり、今後とも研究科全体にとっても有意義な活動として発展することを期待する。

（文責：吉田 正純）